

して乗船したので、現在でも戦友間で「高橋の軍隊手帳」としていろいろな証明用として利用されています。

帰りの航程は二年前と較べれば半分の日数十二日間で浦賀に上陸、十二月二日懐かしのわが家に帰りました。

南方軍補充要員

プケット島で強制労働

高知県 植田 太郎

私は昭和十九年九月二十五日、現役兵として徴兵され、一生涯忘れることの出来ない戦争体験をしたのである。

四国各市町村から郷土の人たちの信頼と歓呼に送られ栄えある現役兵として、勇名その名を知られし第十一師団歩兵第十二連隊留守隊に入隊した。大東亜戦争も漸く決戦の様相を呈し、国家の総力を結集して戦い抜かんとする時なのである。

集まれる者は選り抜かれたる偉丈夫であり、尽忠報国の念厚き青年達であった。

私は本日を期して大日本帝国軍人となり得たる喜びと感激に打ち振るえたのである。先輩勇士の跡を継ぐ我々に弱兵はなく皆一騎当千の強者であった。

普通寺練兵場や大麻山演習場にて訓練を重ね、徳島県箬蔵方面機動演習の後、待望久しい出動命令が下った。

十月二十三日夜、粛々として普通寺を出発し、門司港付近で集結のあと、いよいよ輸送船「有馬丸」一万二千トンに混成兵千二百名が乗船し、祖国日本を出港した。

怒濤逆巻く大海原を進路を南に向け、台湾を過ぎると飛行機による爆弾攻撃、潜水艦による攻撃を受けた。しかし無事洋々たる西太平洋を突破し、船中での苦勞を重ねたが、十一月九日無事にシンガポール港に上陸。プキテマ高地にて訓練を受けたあと、十一月二十五日マレー半島マラッカ海峡に面するポトデクソンに移駐、同地において淀兵団と合流し、徹底的な猛訓練を受け

た。

十二月二十三日、マレー半島中部のタンジョンマリムに移動し、武勇の誉れ高き久留米山砲兵、野砲兵第九十四連隊の中堅として活躍することになった。

引き続き金沢第九師団出身の將兵を迎えて兵力を増強し、マレー半島北部防衛の主力部隊として、ビルマ領ビクトリヤポイント、泰国サンボンスングバタンアロスターやタイピンに分散し布陣、昼夜兼行の陣地構築であった。

我が野砲兵第九十四連隊、第一中隊清隊は泰領ブケット島第一線の守備につく。昼夜兼行の陣地構築、昼は木の葉で偽装し、夜は後方から第一線に弾薬運び、敵に必殺の砲撃を集中し、敵を圧倒全滅せんものと打って一丸となり、將兵の意気天を衝く勢いであった。ブケット島は幅八キロ、長さ三十二キロと細長い島で毎日作業の繰り返しであったが、昭和二十年になって爆撃は頻繁になってきた。ビルマの戦況は日に日に悪くなった情報が入る。

七月下旬、我等の島には連合軍のグラマン戦闘機が

毎日三十機位低空攻撃で来襲、敵の操縦士の顔が見える。残念ながら制空権は連合軍の手中にあり、我々は只々見守るばかりの戦況であった。

昭和二十年八月十日、連合軍の巡洋艦三隻、輸送船二十数隻で我がブケット島は包囲され、南端の歩兵部隊は艦砲射撃を受け、一個小隊位が全滅した。堂垣内武憲中隊長の命により全員集合、「愈々最後の時が来た。大日本帝国の為に最後の一兵になるまで戦い抜いてくれ」と日本の方向にむかって別れの挨拶をする。家族の顔が臉に浮かぶ、戦友同志は別れの言葉を交わし、全員顔色は土色であった。

私達は島の中腹の陣地であったので、連合軍の攻撃もなく、こちらは発砲しなかったため幸いにして命を永らえることが出来た。大隊長も、もう生きて帰れないと覚悟を決めておられたようだが、二三日後に連合軍の巡洋艦や輸送船が一隻去り、二隻去り全部ビルマに向かったためブケット島守備隊は助かった。

その船団はビルマのラングーンに上陸、日本軍に損害を与え、その戦況は口に言い表せない悲惨な戦況で

あつたと、陸路泰領にのがれ、マレー半島に着いた兵から聞いた。その後も、ブケット島にもグラマン戦闘機が毎日來襲し、攻撃が続いた。

しかし八月二十四日現地人の話によると、日本は負けたとうわさを聞いた。午後になってうわさが真実となり、中隊長の命令で集合、「日本国は連合軍に対して降伏した」と通告があつた。戦友同志は天を仰ぎ、地に伏して泣く、その様は悲壮極まり無いものであつた。

間もなく英軍が上陸して来て、武器を全部渡せと言ふことである。武器を渡すため一個小隊位を残し、我々は武器を置いて船で三日三晩かかってタイのキャンタンに引き揚げた、そこでまた命令で貴重品を全部没収されてしまった。時計も何もかもである。

その後国境の町ハダイに日本兵が大勢集結し、連合軍の命令で戦後復旧作業をさせられた。マレー半島のマドアランでの石炭の露天掘り作業である、ツルハシで掘ってトロッコに乗せて運ぶのであるが、朝食はビスケット一枚、昼はビスケット二枚、夜は混合食での

強制労働であつた。その後も転々と各地を歩いてウルガリに行き、農場作りのため木材を伐採し、開墾する作業である。朝八時頃より夕方五時位までの労働である、現地はすごく暑いので、腰に麻袋を巻いてハダカで伐採である。

現地には大きなアリやサンリが多くいる。またマラリアにもかかって何十人もの戦友が死んだ。マラリアが発熱したら戦友の毛布を集め、その者に掛けて、皆でその毛布の周りに座って。それでも悪寒が来てふるえているのである。それでその患者に衛生兵が特效薬（キニーネ）を持って来て飲ませる。私も一回罹つたが一週間位は仕事が出来なかつた。

ウルガリでは約一千町歩位の木材を伐採し、焼いて別の場所へ移動し、今度は石割りである。石をハンマーでたたいて、道路舗装用の碎石用作りである。朝八キロの道を歩いて、そこからダンプに乗って石山へ行き石割り作業である、石山は特に暑い、午後の二時頃になると風は全くなく、空飛ぶ鳥が暑さで落ちる程の暑さの中での作業であつたが、だんだん作業にも馴

れて来た。

昭和二十一年の二月に帰れるとか、六月に帰れるとかの話が出たが、なかなかその実現がむずかしかった。それで最後はシンガポールに集結して、やっと昭和二十一年十一月中旬に輸送船が迎えに来て乗船し、途中台湾経由し、十二月五日、佐世保港に上陸し、懐かしい高知へ復員することが出来た。

ラバウルの想い出

愛知県 高橋 正 己

昭和十八年五月十八日、豊橋予備士官学校の雇員として働いていた私に召集令状がきた。

当時二十八歳の青年でした。翌日、豊橋の中部第六二部隊に入隊、朝六時起床、夜九時消灯の生活を一週間続けたら、連隊長の乗馬姿を先頭に勇ましく進軍ラッパを吹いて隊伍を整えて豊橋駅まで行進し、小学生の音楽隊吹奏のなかを広島に向かった。

そこで一週間待機し、呉から輸送船十一隻が巡洋艦、駆潜艇等に護衛され玄界灘を渡り台湾に寄港、マニラを経てセブ島で教育のため三か月滞在、パラオ島を経由、目的地ラバウルに到着した。その間の二十日間は赤道直下のため船内の温度は急上昇し、まるで「ムロ」に入ったようだった。

甲板に出れば鉄板は焼けてやけつくようので、とても寝られたものではなかった。敵の魚雷監視は昼夜を分けず続けられた。

当時のラバウルの状況は、まだ良かった時で、軍艦・船舶約七十隻、軍用機二百機、食糧は五か年分があるとのことでした。

上陸してから十日目にB 29が百機編隊で来襲、二百五十キロ爆弾二百発を雨あられと投下した。我軍飛行機も直ちに応戦のため飛び上がった。爆弾が機体から離れた時は小さく見える弾が、見る見る大きくなって落ちてくるのを私は山の上から見上げていたが、滞在中の我が戦艦、巡洋艦から射ち上げる対空砲火の流れ弾が射ち込まれ、敵味方の十字砲火にさらされて、